

一人は皆のために 皆は一人のために



わだち

福脊連通信
2024.2
No. 218

編集：福岡県脊髄損傷者連合会 〒830-0001 福岡県久留米市小森野 8-23-201 TEL092-771-6744

公益社団法人全国脊髄損傷者連合会第22回定時総会福岡県大会報告

事務局長 大里 恵

大変遅くなりましたが、第22回定時総会福岡県大会について簡単に報告したいと思います。

参加された方もおられ、ご存じの方も少なくないと思いますが、また、既に総会資料等配布されていますので、今さらと思いますが、動ける者が僅か3人という中で、あの大きな大会を無事終えたことは今でも奇跡だと思っています。

もう生きている間に二度と福岡で行われる事はないと思いますが、実は今回で2回開催されました。愚痴になるかも知れませんが、1回目参加された方もおられると思いますが、1回目は会員も多く、沢山動ける方がおられ、会場のホテルの名前も変わりましたがドーム横のシーホークホテルという大きなホテルで、開催するほどの勢いがあったと思います。しかし、今回は綱渡りというか個人的にはやけくそでやったような感じです。

本部との会議は数知れず、本部からの指示も数知れず、開場のアクロスや懇親会の西鉄グランドホテルとの打合せ、全国の会員が宿泊するホテルの手配、ボランティアの確保等、とにかくやることが多くて、心身とも回復するのに個人的には1ヶ月は要した感じです。参加いただいた福脊連の会員の方には大変遅くなりましたが、心よりお礼を申し上げます。また、参加できなかった方は会員という形で支えていただきありがとうございました。



佐賀インターナショナルバルーンフェスタに 初めて行ってきました

大里 恵

佐賀インターナショナルバルーンフェスタが昨年11月1日～5日に行われました。4年ぶりの世界大会で、平和の願いも兼ねてウクライナからも参加があり、その他各国からも参加がありました。

平日の3日(火)だと人も少ないだろうと、前日から一眼レフカメラやスマホの点検を済ませ、大会ホームページも調べ、車椅子駐車場があるのも確認、開場時間も5時からと確認。

21時に眠りにつき、朝2時30分に起き、軽く朝食を食べ、いざ佐賀へ、逸る気持ちを抑えつつ開場時間の5時少し前に到着。警備員さんがいたので、「少し早いけどいいですか?」と尋ねると「あ～5時という時間は事務局が間違えて!」

えー昨日開場時間を確認したのに～ そそそんな～ 初めて来たのに・・・仕方なく近くの公園の駐車場でシートを倒し、30分時間を潰すことにしました。予定時刻の5分前に出発、やっと入場でき障害者では一番らしく、最高の位置を確保、思わず早起きした甲斐があったと、

苦労が報われた感じがしました。開催場所が河川敷なので霧、霽?が出てバルーンは飛ぶのかと心配しましたが、開催時刻の7時には見事な晴天となり、それからは一心不乱にカメラとスマホを取っ替え引っ替え撮影しまくりました。なお、寒いのと抜群の位置なので、車から降りることなく、運転席の窓を開けて撮影に没頭しました。

気がつくと既に8時30分!直ぐに家路につきました。ちなみに普通は1000円徴収されるようですが、障害者は駐車場の駐車料金は無料でした。もう二度と行くこともないでしょうが、バルーンが大空に上がって行く姿は見事で感動しました。



福岡県脊髄損傷者連合会第43回総会報告

全国総会が6月に開かれた関係で、福脊連総会の日程が9月30日となってしまいました。今回の総会でかなりの改革が行われました。皆様もご存じとは思いますが、理由として実働できる会員がごく僅かということです。また、会員数もかなり減り、収入についてもかなりの減となり、ご存じのようにクローバープラザの事務所も維持できず、閉鎖となっています。そんな中、よく全国大会が開催できたと、今でも不思議でなりません。

福脊連総会の内容は確定した総会議案書を

ご覧いただきたいと思います。最も変わったのは会費と組織体制だと思います。今回はWave会議となりましたが、次年度以降の総会は少人数でも構わないので、直接対面して総会を開催したいものです。どうしても移動が難しい方はWaveでの参加も大歓迎です。なお、1年間不定期ですが役員会(Wave会議となるとはと思いますが)を行いますので、その折には会員の方も是非参加いただきますようお願い致します。

大久保さんとバリアフリーチェック

～福岡空港国際・西鉄バス研修～

東 聖二

電動車いすを利用する大久保健一さんは、全国各地でバリアフリーチェックを行っているとてもエネルギー豊かな方です。

今回、福岡に来られ、バリアフリーチェックの呼びかけがあり参加しました。

11月29日は福岡空港国際線のバリアフリーチェック、12月4日は西鉄バス担当者と意見交換を行いました。

なお、天神地下鉄七隈線のバリアフリーチェックは、大久保さんが体調不良の為、延期となり4月に行う予定です。

■福岡空港国際線



福岡空港国際線は、コロナ禍を経てインバウンド（訪日外国人）観光客が戻ってきました。福岡空港で

は国際線の受け入れ拡大に向けて、2025年完成予定の滑走路を整備中です。

国際線ターミナルを増築し、新たにコンコースが整備され、運用を前にバリアフリーチェックを行いました。

持ち物検査を受け、3階の搭乗待合室エリアに入ると、エリア毎に日本らしい四季を感じさせるデザインが施されています。広いエリアで床面は少しクッション性があるので、長時間、手動車いすをこぐと疲れを感じました。

スマホやパソコンの充電に使えるスペースは至る所



コンセント付きのデスク

にあります。車いすで使いやすい電源コンセント付きのデスクに車いす席を設置してほしいと要望しました。

バリアフリースイートイレには、オストメイト、大人も使えるベッド等を備えています。しかし、衣服をかけるハンガーの位置が高く、車いす使用者には使えないので新たに低い位置にハンガーの設置を要望しました。一般トイレ内には手動車いす使用者も使える広めのトイレが設置されていました。



バリアフリースイートイレ

最後に搭乗待合室と飛行機をつなぐトンネル通路（ボーディングブリッジ）を見学。段差は無く、実際に飛行機とつながる時は傾斜も少し緩やかになるとの事でした。

担当者から「自分たちが気づかない箇所を指摘していただきとても参考になりました」と話されました。

改めて障害当事者がバリアフリーチェックを行い、提案する大切さを感じました。



段差のないボーディングブリッジ

■西鉄バス研修

大久保さんのワンステップバスのスロープ転落事故を受け、大野城市にある西鉄バスの研修施設で担当者と意見交換を行いました。



会場に着くとワンステップバスとノンステップバスが準備されていました。まず、西鉄



車いすを固定します

バスの担当者が電動車いすの乗車から固定までの一連の介助を行います。その後、参加者も

実際に試乗し意見交換が行われました。

<意見>

- ・ワンステップバスからスロープを引き出す際にスムーズにいかないケースが多い。研修及び車両の点検項目に入れて欲しい。
- ・地方は、ノンステップバスの導入が遅れている。地域格差を無くして欲しい。
- ・スロープを降りる際、介助の基本は後ろ向き。大久保さんは前から降りの方が安全に降りやすいとの事。本人に介助の方法を確認して欲しい。

引き続き、西鉄バスが障害者にとって利用しやすい交通機関となるよう働きかけていきたいと思います。



前からスロープを降りてみました

会員紹介

はじめまして。児玉良介と申します。1970年福岡県北九州市生まれ、53歳になります。19歳の時に、C5、6を損傷しました。

以下は、ある時、受傷してから現在に至るまでのこととお話しさせてもらう機会があり、その時に使った原稿です。私の自己紹介として、今回改めて使わせてもらうことにしました。どうぞよろしくお願いいたします。

●受傷直後

私が頸髄損傷の障害者となったのは、1989年の夏のこと。当時私は、四国の高知大学というところに通う2年生で、親元を離れて一人暮らしをしていた。学生生活を楽しむための資金稼ぎに、家庭教師などいくつかのアルバイトをしていて、その夏は小学校のプールの監視員もしていた。アルバイトの最終日、私は何気なしに飛び込んだプールの底で、頭を打ち、首を骨折

した。

骨折と同時に気を失い、次にはっきりとした意識が戻った時、私は病院のベッドの上にあった。数人の医師が私を囲んで立っており、その一人が私に「手を動かせる？」尋ねた。私は動かそうとしたが、手がどこにあるのかわからなかった。骨折部位が動かないように、仰向けの状態で頭を固定され、目に映るのは天井の様ばかりだった。それを見つめながら、「これは悪い夢

で、目が覚めれば、元に戻っているはずだ」と、いつも自分に言い聞かせていた。

三か月ほどその病院にいた後、私は北九州市のリハビリ設備の充実した病院に転院した。そして、その新しい病院での生活を送る中で、自分の障害、今後予想される将来などが、だんだんとわかるようになっていった。

一生車椅子生活であること。手足に麻痺が残り、立つことはおろか、ベッドでの寝返りも難しいこと。そのため、着替え、排泄、入浴などに介助が必要であること。また、鎖骨から下の感覚がなくなり、暑さ寒さに極度に弱くなったこと。汗をほとんどかかないせいで、夏場エアコンのきいていない屋外などにいるとどんどん熱がこもっていく。反対に冬場は、感覚のない足などが冷たくなっていき、ほうっておくと風邪をひいてしまう。こういったことは、それなりに予測していたことだったが、はっきりとわかるにつれ、精神的にとてもつらかった。

就職、結婚、子育てといった、多くの人たちが進むコースから大きく外れてしまった自分を、「人生の脱落者」のように感じた。

また病院での入院生活も非常に苦しいものだった。入院中の介助は付添婦と看護師が行ってくれたが、その「付添婦・看護師」と「患者」との間には、「介助をしてあげている側」と「介助をしていただいている側」とでもいうような関係が成り立っていた。

失便をすると、「大変!大変!」どこか責めるように大げさにくり返す付添婦がいたり、「毎日好きなときにテレビを見て、好きなときに昼寝が出来ていいわねえ」と言った看護師がいたり、同室の患者の面会者がいるにも拘わらず、カーテンをろくに閉めず、私の着替えや排便の介護を行う付添婦がいたりした。何人かの付添婦や看護師は、障害のことなら何でも知っているといわんばかりの態度だった。そして、介助の手間のかからない、自分のことは自分で出来る患者が、よい患者で、その人たちのお好みだった。

当時私の両親は、父親が 65 才、母親が 54 才

という年齢で、私はゆくゆくは病院や施設で生活するしかないだろうと考えていた。「この先もずっと、こんな傲慢不遜な付添婦や看護師に世語してもらいながら、卑屈に生きていけないのか」と考えると、将来は地獄のよう思えた。夜、布団を頭までかぶり、「こんな人生なら、死んだ方がましや」と泣きながら思った。

その病院での一年あまりの入院期間中、そしてその後の数カ月の自宅療養期間中、私が考えていた唯一のことは「どうやって死ぬか」ということだった。でも、そんな気持ちを家族や病院の職員に、少しでも話すことはなかった。家族にはただ悲しませるだけで、病院の職員には到底理解してもらえないようには思えなかった。この世に未練もなかった。自らの命を絶つことになんの罪の意識もなかった。でも、実際に死ぬということは、自分で考えていたほど単純ではなかった。自殺のための準備や段取り、そして実際に死に至る行為を、自らの手でやらなければならないのは、とてつもない苦しみだった。睡眠薬を大量に飲んで死のうと思ひ、電話帳から薬局の住所や電話番号を調べながら、涙が後から後からとめどなくあふれてきた。もうどうしようもないくらいに、苦しくて、寂しくて、悲しかった。

「障害を持って生きていくこと」は、大きな苦しみだった。でも、「自殺をすること」はそれ以上の苦しみだった。私はどうしても死ぬことができなかった。

私は、「死ぬのがこんなにも苦しいのなら、まだ生きていく方がましだ」と思った。でも、死ねないから、「仕方なく生きる」というのでは、結果はこれまでと何ら変わらない。なので、自分で自分に言い聞かせるように誓った。「この先、どんなに苦しいことやつらいことがあっても、負けずに戦って生きていってやる!」と。

不思議なことに、もう死ななくてもいいんだと思うと、肩の荷が降りたようにほっとした。

動物的本能で、心の奥では、「死にたくない、生きたい」と強く望んでいたのかもしれない。

怪我をして一年半、それは私の人生で、もっとも過酷な時期だった。

●大学復学

私が自殺をあきらめ、がんばって何とか生きていこうと決めたのは、1991年の2月頃だった。そして3月、復学することに決めた。

私は、大学2年生として、再び高知に戻っていった。キャンパスの裏門から50メートルほどのところにある木造アパートの部屋を借り、車いすでも生活できるように、入口などを改造させてもらった。キャンパス内のいくつかの建物には、入口のスロープや身障者用トイレが設置され、私が受ける講義は、極力一階にある教室にしてもらった。一日に二つか三つの講義を取り、教室までは車いすを、どうにかこうにか、こぎながら通った。

新しい生活になれるのは、やはり大変だった。以前は170センチあった身長が、車いすの障害者になってからは120センチ程になり、ほとんどの人達から上から見下ろされるようになった。すれ違う際、横目でこちらに向けられる視線は、とても嫌だった。また、人に何かものを頼むことにもどこか低抗があり、教室の入口の段差を越えるのに、「手伝ってくれませんか」、落としたペンやノートを拾うのに、「拾ってくれませんか？」と、すんなりと口に出せなかったりした。

特に大変だったのは、体調のコントロールだ。その頃、排尿は膀胱ろうという方法を取っていた。どういうものかというと、膀胱の上に穴を開けて、そこに細いゴム管を通して、それを通して排尿をする。ゴム管の先には尿のたまるバッグをつけていた。

講義中にバッグが尿でパンパンになって、気分が悪くなったことがよくあった。また、排便の方も、夕方行う予定が昼間急にもよおして失便し、車いすのクッションまで汚してしまうこ

ともあった。そんな時は、そんな体になってしまった自分をとて情けなく惨めに感じた。

夏冬の体温調節もやっか이었다。夏場、講義を受けてアパートに帰ってきた時には、体に熱がこもりすぎていて、アイスノンや濡れタオルで全身を冷やさなくてはならないことがよくあった。冬は冬で、洋服を五、六枚着て、さらに使い捨てカイロを足や背中に何枚も貼って出かけていた。

とにかく、最初は大変だった。でも、そうだったことも、月日を重ねるうちに少しずつ、何とかなるようになっていった。キャンパスライフをエンジョイするというには、ほど遠かったが、少しずつましにはなっていた。

3年間の学生生活は肉体的にも精神的にも大変な部分がたくさんあったが、私はなんとか大学を卒業することになった。障害を受け入れるというのには、まだまだほど遠い自分だった。でも、絶望の淵をさまよっていた三年前の私とは違っていました。大学をちゃんと卒業できることは、大きな自信となっていた。

(次号に続く)

編集後記

2024年は新年早々、能登半島の大地震に続き航空事故と心が痛む出来事が続く幕開けとなりました。

能登半島地震から1ヶ月が過ぎましたが、連日、大変な被災状況が報じられています。

一日も早く日常を取り戻すことができますよう祈るばかりです。

さて、今月号では、新入会員の児玉さんにご投稿いただきました。読み応えのある文章で受傷当時に想いを馳せました。次号もお楽しみください。

今年もよろしく願いいたします。(H)

